

<巻頭言>

炉物理は大事だから

東京工業大学 小原 徹

部会長として巻頭言の原稿を頼まれた。言及すべきことはいろいろあると思うけれど、大学の人間なので今大学で起きていることを書いておこうと思う。

大学は理工学分野間の戦国時代となって久しい。全体がシュリンクする時代である一方、新しい分野が次々と立ち上がり、勢力を破竹の勢いで伸ばしつつある。いまは大学で研究や教育活動をしよと思ったなら、その分野の存在意義を主張して、それを認めてもらわないといけない。そしてその存在意義のあるなしを判断するのは通常普段は全く関係のない分野の人たちである。炉物理分野の研究活動の場や人を確保したり、教育活動を続けようとおもったら、原子力とは普段無縁の人たちに納得してもらわないといけないのである。

私は原子力は日本あるいは人類全体の発展には不可欠な技術で、炉物理はその技術の根幹をなす分野であると思っている。日本の大学でその研究と教育を積極的に進めていくのは極めて大事なことで、必ずやらなければいけないことと思っている。そういうことを私は大学内で主張していくわけである。

しかしながら、この大事だから、という主張はどうも分が悪い。私が普段接する大学の人たちは、もちろん頭から原子力を否定している人もいるけれど、大半は論理的かつ客観的にものを考えられる人たちである。こちらの言うことにもちゃんと耳を傾けてくれる。でもそこで、大事だから、ということをどんなに力説しても、なるほどではそのためのリソースをそちらの分野に分け与えましょう、ということにはならないのである。お気づきと思うがこれは炉物理に限ったことでなく、原子力分野全体にあてはまることなのである。

いま大学で理工学研究や教育に力点を置く基準は、例えば将来大きな産業に発展する可能性があるとか、イノベティブなアイデアがあるとか、異分野同士が融合して新たな技術を生み出す可能性があるとか、どこもやっていない挑戦的な取り組みをしているとか、多くの学生が魅力を感じてその分野に押しかけてくるとか、世間向けのいい宣伝になるとか、産業界から多額の資金が期待できるとか、だんだん気が減入ってきたが、そういうことなのである。

日本の大学での炉物理を含めた原子力分野の研究と教育はすでに60年以上の歴史がある。これまでの先人の実績や経験を踏まえつつ、常に新しいことに挑戦していく姿勢を持ち続けることが大学でその分野が発展していくために大事なことなのだと思っている。

(2018年3月3日記)